

ナジブ氏が第6代首相に就任 (2009.4.3)

人事からみるナジブ新政権—ナジブはマハティールの影を振り払うことができるのか

伊賀司

(神戸大学博士課程)

ナジブの新首相就任を挟んで、マレーシアでは重要な政治イベントが目白押しであった。中でも、マレー人と党 UMNO の党大会と党役員選挙、組閣、3 選挙区での補選は重要なイベントであった。3 月の UMNO 党大会とナジブ新首相就任後の組閣について、一部の報道や、今やマレーシアでは重要なメディアとなったブログの世界では、大勢が事前の予想と違わず、「サプライズ」が少ないことを指摘する声があるが、これまでの UMNO 党人事と組閣の暗黙のルールからすると、無視できない傾向が表れている。

UMNO 党大会では党序列のトップの総裁は党役員選挙のルールによって無投票当選が決定した。党総裁が無投票当選するのは「UMNO の伝統」からするとまず順当な結果である。通常、マレーシアの UMNO 党役員選挙で注目すべきはナンバー3 の副総裁補の選挙である。3 人の議席を争う UMNO 副総裁補選挙で、注目すべきは得票数トップで当選したのがアフマド・ザヒド・ハミディである。ザヒドは 1998 年の UMNO 党大会当時、UMNO 青年部長として当時の首相 (UMNO 総裁) マハティール批判の先鞭をつけた。その後、党内の「若手」の声に押される形で当時の副首相 (UMNO 副総裁) アンワルはマハティールと対決、その後、政府・与党から追放されたことはよく知られている。ザヒドはその際、国内治安法 (ISA) で逮捕され、失脚した。その後、アブドゥラ前政権下でザヒドはナジブとの良好な関係によって徐々に党・内閣内で復権していたが、漸く失脚前の失地を完全に回復したと言えるだろう。

組閣において注目すべきは副首相ムヒディン・ヤシンが教育大臣を兼任した点である。多民族国家マレーシアでは教育大臣は重要ポストで首相や副首相へのキャリア・パスの中で一度は経験しなければならない重要ポストである。だが、教育大臣就任は副首相に就く 1 つか 2 つ前のポストで、副首相が教育大臣を兼務したのは筆者の記憶だと独立前のトゥン・ラザク (後の第 2 代首相) を除いて他にはない。副首相はこれまで防衛、財務、内務といったポストを兼務してきた。その点から言えば、内務大臣に就任したヒシャムディン・フセイン (UMNO 党副総裁

補)は次期リーダーの地歩を確実に進めたと言える。ムヒディンの教育大臣兼務は副首相に就任した後でトップ・リーダーが経験しているはずのポストを急遽割り当てた側面を否定できない。

UMNO と内閣の人事から見えるのは、UMNO を中心とする国民戦線体制はマハティール時代の 90 年代以降、舞台裏でひっそりと進行してきた長期低落傾向から脱却できていない点である。中でも 1998 年にアンワルー派を政府・党から追放した影響とその揺り戻しの混乱の中で次代のリーダーの発掘・育成に未だ問題を抱えていると言えよう。マハティールは未だマレーシア政治に間接的・構造的な影響を与えている。

もう一つはより直接的なマハティールの影響である。前述の UMNO 党役員選挙では青年部長にアブドゥラ前首相の娘婿のカイリ・ジャマルディンが当選した。これまでなら青年部長は閣内で何らかの大臣ポストを得るのが通常であったが、カイリには閣僚ポストが与えられなかった。一方でマハティールの息子で青年部長選挙で 3 位に終わったムクリズ・マハティールが国際通産副大臣として入閣した。この処遇について、党と政府の中でアブドゥラ前首相に近いグループが将来、不満を持つ可能性がある。また、ムクリズの入閣により前政権下で批判を繰り返したマハティールを取り込んだ形になっているが、ナジブが構造改革を進める上でアブドゥラ前首相が失敗した党・政府の腐敗や大規模プロジェクト見直し等の「マハティールの負の遺産」に直面せざるを得ない。その際、老いたとはいえ、生来の批判者気質を持つマハティールがどのように動くかも予想はできない。

ナジブの首相就任直後の 4 月 7 日に行われた 3 補選(下院 1 議席、州議会 2 議席)では下院と州議会選挙区で野党が勝利し、与党が勝利したのは州議会の 1 選挙区のみだった。終わってみれば補選前と議席の改変は無かった訳だが、与党や政府系メディアが祝賀ムードを演出していた中での現状維持は、与党に対する逆風が依然として止んでいないことも感じさせる。ナジブに残された時間は少ない。ナジブが国民戦線体制を立て直し、次代の有望なリーダー層の発掘・育成にも手を付けることができるのか、注目である。■